

2016年に試される日本の科学技術外交

三重県の伊勢志摩で5月26日からG7主要国首脳会議（サミット）が開催された。1975年にサミットが始まって以来、6回目の議長国を務める日本にとって、今回のサミットは「科学技術外交」を通じて積極的平和主義を世界にアピールする重要な場となつた。また、G7サミットに先立ち5月15～17日に開催された、「茨城・つくば科学技術大臣会合」では、海洋観測における国際協力や、高齢化社会の課題解決につながる医療介護ロボットなど日本の強みが紹介され、我が国の科学技術外交に注目が集まつた。今年は、サミットに統いて、第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）や北極に関する科学技術大臣会合など日本の科学技術にとって重要な国際舞台が目白押しである。

我が国において、科学技術と外交を結びつける「科学技術外交」は、サミットにおいて科学技術大臣会合を設けることを提唱したことから始まる。2008年の洞爺湖サミットでは、初めて科学技術大臣会合が開催され、また同年、総合科学技術会議は、科学技術外交の展開の重要性について提言をしている。その後、昨年9月には岸田文雄外務大臣の下に科学技術顧問が設置され、初代顧問には、岸輝雄東京大学名誉教授が就任した。さらに、科学技術顧問を支えるため、17人の有識者で構成された科学技術外交推進会議も発足し、G7サミットやTICADなどに向けて、日本の科学技術の強みをどのような分野で打ち出せるかといった、具体的な戦略について議論を重ねている。

つくばで開催された科学技術大臣会合では、冒頭、「第5期科学技術基本計画」で掲げている Society 5.0 について解説があり、4つの個別課題と2つの分野横断的課題が話し合われた。個別課題、分野横断的課題は以下のとおりである。

G7科学技術大臣会合のアジェンダ

<個別課題>

- ① グローバル・ヘルス
- ② 女性の活躍と次世代を担う人材の育成
- ③ 海洋の未来
- ④ クリーン・エネルギー

<分野横断的課題>

- ① インクルーシブ・イノベーション
- ② オープン・サイエンス

の女性活躍の議論につながった。当初、安倍晋三首相が言っていた「G7サミットでは日本の文化や伝統に加え、ハイテクやイノベーションといった、日本ならではの魅力を世界に発信したい」という目標は、日本の科学技術を生かした外交を展開したことで実現したといえるだろう。

一方で、今年夏にナイロビで開催されるTICAD VIも重要な科学技術外交の舞台である。TICADはこれまで5年ごとに開催されていたが、今回から3年ごとに開催されることになった。また、これまで日本国内で開催してきたが、今回は初めてアフリカ・ケニアで開催することが決まった。アフリカ開発支援において日本の存在感が相対的に低下しつつある中、科学技術イノベーションを活かした積極的平和主義外交により、その存在感を回復したいというのが狙いだ。感染症をはじめ、さまざまな課題を抱えるアフリカの開発支援においても、科学技術外交が果たす役割は大きい。保健医療や人材育成の分野で日本が培ってきた研究開発能力を開発途上国との課題解決に活かすことは、「顔の見える積極的平和主義」を推進する上で大きな意味を持っていることは間違いない。

もう一つ、日本の科学技術外交の場として、最近世界が注目する北極をめぐる問題がある。昨年10月に「我が国の北極政策」が閣議決定されてから、我が国では北極外交を精力的に展開している。北極外交においても、日本の科学技術イノベーションによる貢献が最も重要であると認識されている。今年3月、米国政府は、急速に進んでいる北極の環境変化に対応するため、今年夏に各国の科学技術大臣を招聘し会議を開催すると発表した。わが国の科学技術外交の格好の見せ場になるかもしれない。



2016年に試される 日本の科学技術外交